

## 古代エジプトからの伝言

古代エジプトは都市国家じゃなくて地域国家。すなわち、ナイル川周辺全部が一つになって国家を形成している。農民の中に支配者がネットワークを組んで点在している。そして、都市というものを堀で囲わずに農民と並存している。支配者は農民と同じ空間で、同じ生き方をしている。それだけに支配者と被支配者の間の垣根が低い。何をよすがに生きているかという、町の真ん中に神殿をつくり、町は神殿というものを中心として成り立っている。規模は違うが日本の古代都市と共通するものがある。

それは自然というものが非常に厳しい世界なので、自然と人間が関わって行く中から出て来た。すなわち、自然に逆らったら生きて行けないということ。そのため自然を崇拜する。だから多神教とか自然崇拜というよ

うな言い方をされている。

ピラミッドが大きいという認識は間違い。ピラミッドは大中小いっぱいある。今だけでも100以上見つかっていて、おそらく140~150はあるでしょう。大きいのは少なく中小の方が多い。高さが150m近いピラミッドは、数から言ったらクフとカフラーの二つしかない。

ピラミッドが王の権力の象徴ということはあるかもしれないが、それよりも王が願っていたことは、集めた税金でピラミッドを作ることによって、1年のうち4カ月間、ナイル川が氾濫して農作業ができなくなった農民たちを、労働力として雇用することにある。つまり、農民たちの利益になるようにした公共事業である。これはほぼ間違いがない。20世紀初頭、ピラミッド学者であったクルト・メンデルスゾーンが公共事業という認識をした。そ

れまではピラミッドは王墓だと考えられていた。

ナイル川の氾濫は神様の仕事。神様の仕事を「人間ごときがそれを抑えることはとんでもない」と考えたのが古代エジプト人。自然の氾濫を、災害と考えずに恵みと考えた。そういう意味では、日本の古代の自然信仰とよく似ている。お日様信仰でもあるしね。南太平洋や東南アジアの国々も同じ。それが文明の基調にある。

今、気が付いて見ると地球が危ない。地球上で人間が住みづらくなっている。それで環境主義とも言われる古代回帰ということが起きている。古代回帰とは「古代では自然と共存、共栄していた」という意味。それは資本主義に対抗するすごいセオリーだけど、人間にとっては最も辛いことになる。資本主義は人間を中心として考えるが、環境主義は環境を中心として考える。人間を

中心として考えていったら環境は破滅する。その起因は人口爆発。すべて人口問題に帰結する。まず人口をどうやって抑制するのか。次にどうやって減らしていくのか。人口爆発の危機が一番最高潮に達している。

人類は便益を手にした。しかし今、「それを手にしてなかった時代に戻れますか」と言う問題を突きつけられている。これは相当自分をコントロールしないとできない。そこで模索しているのは「その中間点で折り合おう。そのためにはどうしたらいいのか」と言うこと。循環型の社会を意識的に構築して行かないと、人類はそう長くない。だから、古代エジプトから学ぶものは「自然をもっと崇拜しよう！崇めよう！立ち戻ろう！」と言うことかな。

ギザ三大ピラミッド  
(写真提供：株式会社アクト)

## 吉村作治

YOSHIMURA Sakuji

## ■プロフィール:

サイバー大学学長(工学博士)・早稲田大学客員教授

1943年東京都生まれ。66年、アジア初の早大エジプト調査隊を組織し現地に赴いて以来、40年以上にわたり発掘調査を継続、数々の発見により国際的評価を得る。近年世界に先駆け、人工衛星の画像解析などハイテクを導入した調査によって見つけたダハシュール北遺跡からは、たくさんの貴重な遺物の他、05年1月、未盗掘・完全ミイラ「セヌウ」を発見するという快挙を成し遂げた。さらに07年1月には、同遺跡から夫婦と見られるもの2つを含め計4つの未開封木棺を発見、世界的注目を浴びている。現在、「セヌウ」のミイラマスクを含む発掘成果を日本全国の博物館で巡回展示中。また07年4月、株式会社立で日本初・完全インターネット講義による「サイバー大学」を設立、初代学長に就任。著書に「ぼっくぼっくぼくらはエジプト探検団」(アスコム)「ミイラ発見!!—私のエジプト発掘物語—」(汐文社)他、多数。

公式HP <http://www.egypt.co.jp>

